

---

# コーヒーの時間です。

沙久

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コーヒーの時間です。

### 【Nコード】

N6686Z

### 【作者名】

沙久

### 【あらすじ】

駄目人間の僕は、今日もコーヒーを入れます。

## 今日も駄目人間

駄目人間という言葉は、僕の為にあるんだと思う。

小学校から成績はボロボロ、運動もメチャクチャ。人と話すのもままならないから教室でも浮きまくり、いつだって一人だった。

だんだんとそれが辛くなり、中学校から不登校及び引きこもりになった。人生がどうでもよくなり、ただご飯を食べて寝る生活を送る。そんな生活に危機感を覚え、通信制の高校に行く。家族の支えもあり少しだけまともな自分を取り戻した僕は、必死に勉強して大学に入った。

大学に入って一人暮らしを始める。今まで支えてくれた家族に恩返しをしようと頑張ったものの、大学の空気に溶け込めず中退、そして社会が厳しくて引きこもり、逆に家族を泣かせる結果になった。

そして1ヶ月前、僕はせめて両親の仕送り無しに生活出来るように引きこもりを卒業し、バイトを始める。

毎日店内を掃除して、レジ打ちをして、休憩時間は先輩にコーヒーを煎れたり、ミスは多かったがとにかく頑張った。今までで1番頑張った。話かけてくれる先輩もいたり、やっと駄目人間卒業だと思っ

た。

しかし今日、僕はバイトをクビになった。

## 幸さんと僕

思えば、今までずっと駄目人間でミスばかりだった僕が1ヶ月続いた事が奇跡なのだ。1ヶ月面倒見てくれた店長に感謝しなければいけないと思う。

それに今までだったらきつと1週間で投げ出していた、これは大きな進歩だ。

そう自分に言い聞かせながらコートを羽織る。早く家に帰ろう、辛い事は寝て忘れるに限る。これからの事はこれからだ。

1ヶ月前、自慢げにバイトを始めた事を話すと喜んでくれた両親に、また仕送りを頼む事になってしまっただろうが、「クビになったんじやしようがないよ」と言ってくれるだろう。

そろそろ出ようか、そう考えていると後ろで扉が開いた音と共に、聞き慣れた声が鼓膜を揺らした。

「お疲れ様ですー……あれ、良太君」

僕の名前を呼ばれ振り返ると、そこにはシフトが一緒になると上手く話せない僕にも唯一声を掛けてくれた先輩の幸さんが居た。幸さんに軽く会釈をすると、幸さんは笑いながら軽く首を傾げた。

「もう終わりなの？いつもより早くない？」

「ああ、えつと……」

クビになったんです、恥ずかしさで小さく掠れた声になってしまっただが、幸さんはちゃんと聞き取ってくれたのだろう少しだけ困った顔をした。

きつと僕にかける言葉を考えているのだろう、僕を傷つけない言葉を。その心遣いが嬉しくもあり、この沈黙が痛くもあつた。

幸さんは数秒考えると、ゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「残念、だなあ」

「……そんな、僕迷惑しかかけてないじゃないですか」  
僕の言葉に幸さんは何度か横に首を振り、小さく微笑んだ。

「確かに、ミスは多かったかもしれないけど、私良太君の入れるコーヒーが大好きなんだ。」

この言葉で思い出す、幸さんは僕の入れた何の変哲もないコーヒーをいつだって美味しそうに飲んでくれていた事を。

「これから飲めなくなるのは寂しいし、今度、良太君家にコーヒー飲みに行っても良いかなあ？」

そして、幸さんは、どこか変わった人だと言う事を。

## コーヒーを求めてきました

「おはよう良太君」

扉を開けると、そこには笑顔の幸さんが居た。

さて、俺はまずどうすれば良いんだろうか。このまま幸さんを招き入れても良いのだろうか。

そもそも、今日俺は幸さんの鳴らしたチャイムの音で目が覚ました。時計を見ると午前10時、きっと宅配便だと思い、軽く髪の毛を手で撫でて寝間着のまま扉を開けてしまったのである。

幸さんがこんなに早くにくるとは思ってたなかった、時間的にも日にち的にも。来るなら午後だろうと思いついていたし、今日来るなんて思っていなかった、昨日約束したばかりなのに。

服を着替えるまで外で待ってもらうか、それともこのまま部屋に上がってもらうか、どれが1番良いのか分からなくてただ悶々と考えていると、幸さんは痺れを切らしたのか「ねえ、」と僕に声を掛けた。

「は、はい？」

「朝早くにごめんね、それ寝間着だよね」

「……はい。」

「早いよなつて思ってたんだけど、どうしてもコーヒー飲みたくなっちゃうて」

我慢出来なかった、と苦笑交じりに言ってくれる幸さん。その言葉がどうにも嬉しくて、照れ臭くて、どうにでもなれ！と扉を大きく開けて中に入る様に促す。

それをみた幸さんはそれまた嬉しそうに笑って「お邪魔します」と靴を脱ぐ。何気に初めて部屋に女性を迎え入れるのだが、果たして大丈夫だろうか。

「何処に座れば良い？」

幸さんはキョロキョロと室内を見回す、生憎あまり人を呼ばない物だから客人用の座椅子なんてものは置いていない。

しかし床に幸さんを座らせる訳にもいかないのです、いつも自分が使っている座椅子を指差しそこに座ってもらおう。自分はそこら辺に置いてある座布団で充分だし、寧ろ床でも大丈夫だ。

幸さんに座ってもらった所で、沈黙が訪れる。ここは幸さんに世間話でもした方が良いのか、すぐコーヒーを入れはじめた方が良いのか。普通は世間話をした方が良いのだろうけれど、コーヒーを飲みながら充分話が出来る……それ以前に、僕は自分から話を振ることなんて出来ない。

「コーヒーを入れようと決心すると、「えっと、コーヒー入れますね」と幸さんに声をかけキッチンへ向かう。

「コーヒーを初めて入れたのは確か高校の頃だ。コーヒーなんて好きじゃなかったけれど、なんだか不思議な器具でコーヒーを入れている父親を見て興味を持ち、やり方を教えてもらいながら入れた。……やはり味は美味しくなかったけれど。」

その経験がバイト先で役立つなんて幸運だった、何故バイト先に器具があつたのかは分からないが。

ヤカンに水を入れ火にかけると、その間に二人分のコーヒーカップと両親に頼んで実家から持ち出してきた器具を出して、ペーパーをセットする。どうやらこのやり方はペーパードリップ式と言うらしい、これも父親に教わった。

準備が終わり後はお湯が湧くのを待つだけ、という所で、ふと気づく。……バイト先にある物と豆が違うが、幸さんはそれに気づいているのだろうか。もしかして、俺が昨日幸さんに入れ方を教えた方が早く済んだのではないだろうか。

少しの不安に襲われるが、今はとりあえずコーヒーを入れよう。ヤカンが甲高く鳴きはじめると火を止め、ゆっくりと豆の上にお湯を

かける。

ゆっくり少しずつ、コーヒーを入れるのに焦っては駄目だ。

無事二人分入れ終わると、零さない様に慎重に幸さんの待つ部屋に向かう。幸さんは俺の手にあるコーヒーカップを見ると嬉しそうに微笑み、先程までそれで暇を潰していたであろう携帯を鞆の中に仕舞った。

「いただきます」

そう言っ僕からコーヒーカップを受け取ると、ゆっくりと口に含む。どんな反応をしてくれるだろうか、机を挟んで幸さんの前に正座すると少しだけ背筋を正す。

幸さんはごくり、と飲み込むと、コーヒーを見つめた。いつもなら直ぐに笑ってくれるのに、どうしたのだろうか、気になるけれど急かすのも申し訳ないので、ただただ幸さんの言葉を待つ。

「……味が違う」

「あ、豆が違うから……ですかね」

幸さんの顔が悲しそうに歪んだ、やはり豆が違ったらいけないらしい。

「あの、もし良かったら、バイト先で入れられる様に入れ方教えましょうか？……本当、もし良かったら、なんです……けど」

緊張で少しだけ吃ってしまったけれど、幸さんはそんな事は気にしなかった様で悲しそうな表情のまま、悩ましげに唸った。

数秒返事を待っていると、幸さんは小さく横に首を振った。

「実はバイト先で何回か入れた事あるんだけど、私が入れてもあんまりしっくりこないの……だからいいや。」

「……そう、ですか」

「うん、だから今日バイト先で豆の種類チェックして、明日持つてくるね」

満面の笑みでそう告げる幸さん、明日も来る気なのかと一瞬驚いたが、幸さんの嬉しそうな微笑みの前で「こないでください」とは言



えず、ただ頷くしかないのである。

## 「コーヒー豆ですよ」

午前10時、部屋中にチャイムの音が響く。

きつと幸さんだろう、一応早起きしておいて良かった。

玄関の扉を開けると、予想通りそこには笑顔の幸さんがいた。

「おはよう、良太君」

「おはようございます」

幸さんは靴を脱いで家にあがり、片手にぶら下げていたスーパーの袋を僕に差し出す。受け取って中を見るとそこにはバイト先でよく見ていたコーヒー豆があった。

「今日からは、これをお願いします!」

「はい」

「コーヒー入れてくれるお礼に、豆は奢りです」

「え、でも」

「良いから良いから!」

気にしないで、幸さんはそう言って僕に軽く微笑みかけると、軽い足取りで部屋に向かう。

本当にお金良いのだろうか、戸惑うものの、幸さんがそう言うてくれているのだ。金欠の僕は申し訳ないが甘えておこうと思う。

座椅子に座った幸さんを確認すれば、僕はキッチンに向かい、いつもの様にコーヒーを入れはじめ。

コーヒーを入れ終わり、幸さんの元に運ぶ。

幸さんは僕……の手に持たれたコーヒーを見るとこれまた嬉しそうに笑う。本当にこの人はコーヒーが好きなんだな、と思いつながらコ

ーヒ―を差し出した。

「ありがとうございます、いただきます」

「はい、どうぞ」

幸さんはゆっくりとコーヒ―を口に運ぶ。それを見て僕は昨日と同じ、机を挟んで幸さんと向かい合って座った。

幸さんは何口か飲むと、満足げに何度か頷きコーヒ―に落としていた視線を僕に向けた。

「この味だ、うんうん、美味しいよ」

「あ、良かったです」

「ほれほれ、良太君も飲みな」

幸さんに促され、僕もコーヒ―を口に含む。苦さが口に広がる、うん、いつもバイト先で飲んでいた味だ。

ちらりと幸さんを見ると、幸さんも微笑みながらこちらを見ていて、なんだか照れ臭くて視線を外す。

「美味しいねえ、コーヒ―」

「……えっと、」

「美味しいよ」

「………はい」

幸さんの持つ空気は、不思議だ。

会話の苦手な僕も、いつの間にか巻き込まれている。実際、あまり僕は喋れていないのに会話が出来た気がするのだ。幸さんはエスパ―で僕の心の中が全て見えるのかと思う位に、幸さんは言いたい事を汲み取ってくれる。

幸さんはふと時計を見た。

「……ああ、そろそろ帰ろうかな」

幸さんは残りのコーヒ―を流し込む様に飲み込むと、空になったコーヒ―カップを机に置いた。

「ごちそうさまでした、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ……」

「じゃあ、今日はこれで」

ゆっくりと立ち上がる幸さんに続いて、僕も立ち上がる。短い廊下を歩いて玄関へ向かう。

幸さんは靴を履くと、くるりと振り向いて微笑んだまま僕を見た。

「じゃあね」

「はい、気をつけて」

「うん、また明日」

幸さんは颯爽と扉を開いて出ていった。

……また明日と言ったけれど、幸さんは明日もくるつもりなのだろうか。

## 僕の日常

昨日、幸さんが家に来た。

一昨日も、先一昨日も、一週間前も、幸さんは家に来た。きっと明日も明後日も幸さんは家に来るだろう、もう僕の中で幸さんにコーヒーを入れる事が日常となっているのだ。

今日もきつと、幸さんは家に来る。いつものように10時に来て、いつものように「また明日ね！」と10時45分位に帰っていくのだろう。

コーヒーを入れる為の機器の準備を始める、ヤカンに水を入れ火にかけるとチャイムの音が響いた。時計を見ると丁度10時、いつもと一緒にいる。

玄関を開けると、そこにはやはり幸さんが居て、軽く挨拶を交わせば家に迎え入れる。最初はどう反応すれば良いのか分からなかったけど、もう慣れてしまった。

ヤカンから発される甲高い音に呼ばれてキッチンに向かう。今日は寒い、早く幸さんに温かいコーヒーを飲ませてあげよう。

いつものカップに、いつもと同じ様にコーヒーを入れる、そしていつもの様に運んで、いつもの場所に座った。

幸さんはいつもと同じ笑顔を浮かべて、コーヒーに口を含む。きつといつもの様に、美味しいと言ってくれるはずだ。

「ありがとう、美味しい」

ほら、やっぱり。予想通り……というより、いつも通りだ。

「今日も寒いね」

「そうですね」

「なんか、あつたかいコーヒーが染み渡る感じ」

「染み渡る、ですか」

幸さんは、僕の言葉にこくりと頷き、またコーヒーを口に含む。沈黙、最初はこの沈黙をどうにかしなければいけないと思っていたけれど、最近はこの沈黙にも存在理由があるのだと気づいた。無駄な物じゃなくて、心地好い物だと。

僕も一口、コーヒーを飲み込む。ちゃんと、幸さん好みの味になっていると思う……多分。

コーヒーを飲みながら、少しの世間話。幸さんが昨日見た猫の話や、テレビの話をややかに聞く。

……実は幸さんの話を聞くのが好きだったりする。

なんだかねで、時計を見ると45分。幸さんは立ち上がり、僕もそれを見て立ち上がる。

ゆっくりと玄関まで見送れば、「また明日ね」と微笑む幸さんに手を振った。これも、いつもと同じだ。

最初は、戸惑ったり緊張したりしたけれど、今はそんな気持ちはない。

寧ろ、この1時間にも満たない時間が、僕にとって唯一の楽しく幸せな時間になっている。きっと幸さんの不思議な力なのだろう。

この時間が日常になった事が、何故かどうしようもなく嬉しいのだ。

## ひとりぼっちの午後

幸さんが帰ってしまったと、静かな時間が始まる。

今までずっと一人だったのに、何故か寂しく感じてしまう。

苦し紛れにテレビをつけても、めぼしい番組もなかったただ雑音が響くだけ、人の声が聞きたくて携帯を開いても、アドレス帳には家族の名前しか並んでいない。

当たり前だ、僕には友達が居ないんだもの。

携帯を閉じて、床にごろりと寝転ぶ。別に友達が居ないのが辛いわけじゃない、ただ今一人で居る事がほんの少し辛いだけだ。

天井をただ見つめながら、頭の中で幸さんの顔を浮かべれる。こんな事になってしまったのは幸さんのせいだ、何故あの人はこんな僕に優しくしてくれるのか。

幸さんが家に来はじめて1ヶ月も満たないのに、今僕の脳内の90%を占めている幸さん。約20年かけて一人に慣れたのに、それを簡単に崩していった幸さん。不思議な力が、魅力が幸さんにはあるのだ。

何故こんなに幸さんの事を考えているのか、恋なのか愛なのか友情なのか、はたまた暇すぎて幸さんの事しか考える事が無いのか。多分、どれも違うんだと思う。

ただ、一つだけ分かるのは、僕は早く幸さんに会いたいという事だ。

だんだんと瞼が重たくなる。最近幸さんのせいで早起きしてたからな、しょうがないよな、素直にこの眠気に負けてしまおう。

お昼ご飯は、後でで良いよね。

## 小さな不安

いつもの様に、幸さんとコーヒを飲んでいた時だった。

「ねえ、良太君」

「はい？」

「えっとね……」

「はい」

珍しく言葉に詰まる幸さん。どうしたのだろうか、凄く気になるけれど、とにかく幸さんの言葉を待つ。

幸さんは小さな声で唸った後、ゆっくりと口を開いた。

「明日、知り合い連れてきても良いかな？」

やっぱ駄目？少し不安そうに僕を伺う幸さん。思わぬ言葉にどう反応すれば良いのか分からない、僕は幸さんのお知り合いと仲良くなれる自信はないし、幸さんのお知り合いと言えど全く知らない人を家にあげる勇氣はない。

けれど、幸さんの言葉を断る勇氣も僕には無かった。こんな事では嫌われないと分かっているけど、嫌われなくなかった。

「……良いです、よ」

ぼつり、と呟くようにそう告げると、幸さんは「本当！？」と嬉しそうに笑った。その笑顔を見て、僕は少しだけ安心する。

「その子ね、高校時代の後輩なんだけど……2つ下だから、良太君と同じ年だね。良太君とコーヒの話したら、行きたいって言いはじめたんだ。」

良太君と仲良くなれると良いな、幸さんは嬉しそうに呟けばコーヒを口に含む。



幸さんのお知り合いってどんな人なんだろうか、幸さんと同じ様に不思議な人なんだろうか、それともしっかりした人なんだろうか、もし緊張して話せなかったらどうしよう……考えれば考える程不安が積もる。

とにかく落ち着こう、冷めてしまったコーヒーを一口飲めば、幸さんにはれない様に小さくため息をついた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6686z/>

---

コーヒーの時間です。

2011年12月24日12時50分発行